



翠巒 Mini Press 第172号 2021/7/19 編集・発行 高崎高校新聞部

生徒第一の生徒会 始動

新生徒会長に小菅くん

新生徒会長小菅くん



先月、新生徒会長に小菅 人くん(2の1)が就任した。そこで今回、小菅会長に生徒会長になったいきさつや一年間の方針についてインタビューを行った。

—なぜ、生徒会長になるうと思ったのか。

一つ目は、オープンスクールの時に見た生徒会の方々が主体的に活動する姿に憧れを抱いたからである。自分もあの方々のように鮮烈なリーダーになりたいと思った。

二つ目は、昨年生徒会に入っていた時に「自分が愛する高崎高校を更に生徒の生活しやすい学校に変えていきたい」という強い志をもったからである。高崎高校は良い学校だと思

が、まだまだ変えていくべきところはあると思案している。—これからの生徒会活動において、どのような目標をもっているのか。

政見放送でも話した「高高ファースト」である。高高生の高高生による高高生のための学校を創り上げるために邁進していきたい。

—目標を達成するために、どのような活動を行なっているのか。

高高生の日頃の意見を聞いて解決していくために、Googleフォームを利用した意見箱(下のQRコードにリンク)を設置した。これを利用して、高高生が生活しやすい学校を創っていききたい。

また、理科棟などの多くの箇所の清掃を行なっている。高高生に気持ちよく学校で生活してもらうために、美化は必須であると考えている。

—生徒にメッセージを。

「高高のための高高」を創っていくためには、全校生徒の協力が不可欠となる。ぜひとも、高高や高高生のために力を貸してほしい。(中澤)

デジタル化の推進

新生徒会長の就任に伴い、新たな生徒会が発足した。生徒会では、様々な活動のデジタル化を進めるなど、業務の効率化を図っている。そこで、生徒会の阿部龍之介くん(2の5)に、現在行なっている生徒会の活動についてインタビューを行なった。

—今年度の生徒会活動の



生徒会による資料作成の様子

学校生活を送ってもらいたいという思いである。高生は、限られた時間の中で部活や勉強に懸命に取り組んでおり、非常に多忙である。我々生徒会にできることは、そのような状況下での高高生を支え、共に居心地の良い学校を創って

好きを極める！ 高高クイズ研究会

高崎高校には、部活と異なる形で活動している団体がある。「クイズ研究会」もその一つである。クイズ研究会は、数学部室を拠点として、現在は数学部員を中心とした11人で活動している。普段は早押しクイズをしたり、クイズの問題集を読み込んだり、他校の生徒とオンラインでクイズ対決をしたりと、各会員が思い思いの活動をしている。また、クイズの傾向を分析して、出題されやすい問題や間違えやすい問題などの解説を、上級生から下級生に向けて行うこともしている。

最後に、後輩に新たに始めてほしいこととして、「3年生は部員が自分だけだった。クイズ研究会を開いたり、積極的に大会に参加したりするなどして、今までよりも活発に活動してほしい」と話した。(桑原)

指針「高高ファースト」には、どのような思いが込められているのか。高高生に、楽しく充実した学校生活を送ってもらいたいという思いがある。高生は、限られた時間の中で部活や勉強に懸命に取り組んでおり、非常に多忙である。我々生徒会にできることは、そのような状況下での高高生を支え、共に居心地の良い学校を創って

—現在行なっている活動の中で、達成感を感じるものは何か。

校内競技大会と校内水泳大会の結果をその日のうちに公表できたことは、良かったと思っている。生徒会の学校行事に関する様々なことが未達成で、達成感を感じるといことはあまりない。そのためこれから運営の仕組みを整えていきたいと思っている。

—今までの活動の中での改善点は何か。

Classroomの活用が、まだ不十分であることだ。これまでに、校内競技会や校内水泳大会の連絡や申し込みなどを行ってきた。しかし、全体的に連絡が行きわたって

が良くなかったりと、Classroomの重要性が浸透していないように感じる。生徒に分かりやすい連絡ができるようになるれば良いと思っている。

—生徒へのメッセージを。

生徒会は学校を支える上で欠かせない組織である。しかし、大規模な活動を行なうためには、より多くの人たちの協力が必要である。ぜひ、学校を支えたいという志をもっている人は、生徒会に入っ

NOTE

興味深いことに、数千年前の思想家による数々の言説が、文明も社会形態も異なる現代社会につながることは、稀なことではない。ビジネス戦略に汎用される、「孫子の兵法」も、その一つとして注目を浴びている▼近日、高校過程での古文、漢文が不要であるという議論が交わされている。しかし、古典文学は本当に、現代を生き抜くにあたり必要で陳腐な内容だろうか▼文部科学省によれば、「古典的な文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」ことや、「人生を豊かにする」ことが、古典学習の目的であるそう。歴史ある文学に対して、このような娯楽性を求めているならば、不要論が行き交ってしまうことは仕方ないことだ▼かつての戦争に用いられた考えが、現代のビジネス戦略に応用されているこの現状から、古典文学に現れる考え方が私たちの実生活や人生において有用であることは明らかである。古典的な作品の様々な考えを通して、積極的に自らの観念や考え方を見直ししたり、新しく発想を得て応用したりすることこそが、学問の本質を突いた目的なのだろう▼論語の有名な一説に、「学而時習之、不亦説乎」とあるように、学ぶことは昔から楽しいことなのだ。さらに、誰かに求められた学びにとどまらず、自ら学んで活用していく。この考えに倣ってみてはどうだろうか。(矢野)



生徒会ご意見フォームのQRコード

日本の伝統芸能に触れる 古典芸能教室

6月18日、群馬音楽センターで古典芸能教室が行なわれた。その際、落語を披露した林家つる子さん（2の1）に話を聞いた。落語を始めたきっかけは、「大学の落語研究会で初めて落語を見て、落語の面白さを知った。江戸時代の話が今まで語り継がれているが、今回の公演での親子のやり取り、車屋とのやり取りなど、感情



力強く演じる林家つる子さん

部分は年配の方が占めている。業界を支えてくれる大切な層だが、時が経つと、見に来てくれる方が少なくなり、業界が廃れてしまうのではないかと懸念がある。若い人にも落語の面白さを知ってもらい、落語の文化を絶やさないようにするため、公演を行なっている」と語った。また、「落語の内容には現代にも共

の部分では現代も変わらないものがあるというところに感銘を受けたことだ」と語り、落語の魅力は、「演劇と違って、演出も一人で行なうところや、同じ話でもやる人によってそれぞれの色が出るころだ」と話した。

通するところがあるため、『落語は昔のもの』という先入観を取り払って、まずは観てもらいたい。寄席は、本来は一日に何十席もあり、好みの人を見つけてから、その人の独演会に行くというスタイルが一般的な楽しみ方だ。しかし、今は配信でも見られるので、そういったところから落語を楽しんでほしい。また、気分が落ち込んでいたら、主人公が最初から落ち込んでいく設定のものを探してみるなど、そのときの自分の状況や心情に合う世界観の話を探すのもおすすめだ」と落語の楽しみ方を述べた。

林家つるさんは、地元である群馬を盛り上げる活動もしている。その活動に力をつけていくにつれて、「群馬を離れて修行をし、帰ってきたときにいろいろな人が応援してくれたり、ぐんま大使になって、自分の知らなかった群馬の魅力に気づいたりした

関東大会で躍動 陸上部



落語家の柳家さん喬さん

ことが活動を始めたきっかけだ。そこで、群馬のPRを手助けし、応援してもらっている恩返しをしたいという思いで活動している。高崎では、音楽センターやシティギャラリーで落語の公演が比較的盛んに行なわれているが、公演が少ない地域には自分から出て落語の良さを伝えたいと思っている」と語った。

古典芸能教室の開催に関して、担当した今井健太先生は「古典芸能には普段触れる機会がないので、これを好機としてほしい。今回の体験を機に、YouTubeや実際の寄席で落語を楽しむようになっ

馴染みのない古典芸能にも身を傾けて聞く姿勢が良かった」と述べた。

古典芸能教室の感想を山下遼くん（2の1）に聞くと、「落語という年配の方の娯楽で、若者とは縁遠いというイメージが強く、今回の古典芸能教室には歴史的なものを見に行くように固く構えた気持ちで行った。だが、落語家の方が話し始めると、その印象は一転し、研ぎ澄まされた絶妙な間は爆笑を誘った。今回の体験を通して、脈々と受け継がれてきた落語の素晴らしい伝統を身をもって味わうことができた」と話した。

（根岸）

落語や講談といった寄席の文化は、江戸時代から続く「エンタメ」だ。一人の話に大衆が耳を傾け、大笑いをして楽しい時間を過ごすという平穩な江戸の様子を象徴する文化である。

現代のエンタメはどうだろう。現在のエンタメといえば、テレビ番組や映画はもちろん、音楽やゲーム、配信コンテンツなど多岐にわたるが、当然これらは江戸のものとは異なる。相違点の一つに、「エンタメらしさ」がある。

してみなされた状態を指す。講談で「勸善懲惡」がよしとされるように、江戸の人々はエンタメがもたらす幸福感を大切にしたいのだろう。この点で、江戸時代には「エンタ

メらしさ」があるといえる。だが、現代のエンタメは、「エンタメらしさ」を失いつつあるように思われる。エンタメが、単なる娯楽として享受されるだけではなく、

論説

エンタメの楽しみ方

「エンタメらしさ」を失いつつあるように思われる。エンタメが、単なる娯楽として享受されるだけではなく、

それにとどまらずに、「意味が分からない」や「悪影響だ」、「昔はこうだった」と書き込む人がいるのだ。だが、エンタメに実用性がない以上、意味や影響を考へること自体ナ

いのだ。その原因の一つに、SNSがある。現代において、SNS上にエンタメに対する意見を書き込む人が一定数いる。感想や考察を共有するくらいなら良いのだが、中には



バトンをつなぐ高の選手

6月18日から21日にかけて、神奈川県等の各陸上競技場で関東高等学校陸上選手権大会が開催され、高崎高校陸上部から8名が出場した。100mに出場した井上直紀くん（3の5）は3位となり、7月28日から福井県営陸上競技場で開催される、全国高等学校総合体育大会陸上競技大会

（以下、インターハイ）への出場を決めた。また、走幅跳では山口權くん（2の6）が7位となり、4×100mリレー（以下、リレー）には松本新大くん（2の7）、桑原拓巳くん（3の2）、山口くん、井上くんが出場し8位を獲得した。

まず、100mとリレーで活躍した井上くんは、話を伺った。井上くんはこの大会について、「関東大会独特の雰囲気や、悪天候の影響で、困惑する場面が多かったが、集中して挑んだ結果、力を発揮でき、100mでのインターハイ出場につながった。しかし、リレーでインターハイに出場するという目標が叶わず残念だ。この経験は多面に活かし

た。また、走幅跳とリレーで存在感を見せた山口くんは、リレー時の心境について、「走幅跳ではあと一步のところまでインターハイ出場を逃したため、リレーへの思いは強まっていた。先輩たちと走ることが本当に楽しかったので、それが終わってしまったことは悔しい。関東大会の決勝を走らせてもらったことに感謝している」とチームの強い結束力がかかる思いを口にした。

次に、リレーに出場した松本くんは、「昨年の時点では勝負にならなかったが、今回、関東大会で決勝の舞台に立て嬉しく思う。一番力を発揮できるチームの強さを実感した。この経験を糧に成長したい」と述べた。

また、走幅跳とリレーで存在感を見せた山口くんは、リレー時の心境について、「走幅跳ではあと一步のところまでインターハイ出場を逃したため、リレーへの思いは強まっていた。先輩たちと走ることが本当に楽しかったので、それが終わってしまったことは悔しい。関東大会の決勝を走らせてもらったことに感謝している」とチームの強い結束力がかかる思いを口にした。

（矢野）